

# 若年プライミングが課題成績と自己効力感に与える影響

矢野下 拓弥

本研究の目的は、プライミング効果が課題成績に影響を与えるメカニズムを明らかにすることであった。これまでのプライミング研究では明らかにされていなかったプライミング課題の問題数の操作、潜在的指標の測定に着目した実験を行った。

実験 1 では、若年プライミングに用いる課題の問題数とプライミング効果の間の関係を明らかにするために実験を行った。プライミング課題として並べ替え課題(乱文再構成課題)を用いた。課題の問題数は弱いプライミングを行う群で 20 問、強いプライミングを行う群で 40 問であった。若年に関するプライミングを受けない群(統制群)の課題の問題数は 20 問であった。プライミング課題の種類については、若年者に対して否定的な課題文を提示する群(否定的群)と、若年者に対して肯定的な課題文を提示する群(肯定的群)の 2 種類であった。40 名の参加者が課題の種類(否定的/肯定的)とプライミング課題の問題数(弱群/強群)によって無作為に 10 名ずつ群分けされた。各参加者はコピー機の設定を行う課題に取り組み、その結果を課題成績として測定した。また、参加者は自己効力感、機器の利用経験に関する質問紙に回答した。結果から肯定的群の課題成績の一部において否定的群を上回っており、若年プライミングの効果が確認された。また、課題遂行にかかった時間においては課題の種類とプライミング課題の問題数の交互作用が見られ、プライミング課題の問題数が課題成績に影響を与えることが示された。また、質問紙による指標から群間での差が見られたが、コピー機課題における群間の差を説明するものではなかった。

実験 2 では、プライミング効果によって自己効力感と課題成績が受ける影響を明らかにするために実験を行った。実験 2 では潜在的な自己効力感を測定するために潜在連合テスト(IAT)を利用した。プライミング課題として実験 1 と同様に乱文再構成課題を用いた。36 名の参加者がプライミング課題の種類(肯定的/否定的/統制群)により無作為に 12 名ずつ群分けされた。プライミング課題の前後で課題成績と潜在・顕在自己効力感を測定した。また、プライミング課題による自己効力感の変化が課題成績に影響を与える、というモデルを仮定し媒介分析を行った。結果より、否定的群における課題成績が肯定的群の課題成績より良かった。また、顕在自己効力感において群間で差が見られず、潜在自己効力感はプライミング課題後でいずれの群においても低下した。実験 2 ではプライミング効果が課題成績に影響を与えておらず、自己効力感はプライミング効果が課題成績に与える影響を媒介するものではなかった。実験 2 における課題成績は実験 1 の結果と一貫しないものであり、群間での課題遂行能力の偏りがあった可能性、実験 2 で用いた課題ではプライミング効果が生じなかった可能性が考えられた。潜在自己効力感がいずれの群においても低下していたため、プライミング課題以外の要因が参加者の潜在自己効力感に影響を与えた可能性が考えられた。

今後の研究においては、プライミング効果により影響を受ける潜在的な指標を明らかにし、その指標と課題成績の間の関係を研究することで、プライミング効果のメカニズムを明らかにすることが出来るだろう。(安全行動学)